

今回、全国学力調査等の結果をまとめました。ここで、私たちが大切にしたいのは、「結果を見ること」ではなく、「結果をどう活用するか」です。

学力調査は、児童一人一人の学力を順位付けするためのものではありません。これまでの学習のどこが身に付いていて、どこに課題があるのかを明らかにし、これからの授業をよりよくするための資料として活用することに大きな意味があります。

今回の資料では、出題の習いや木上小学校と全国平均の正答率を比較するとともに、誤答した児童の人数や割合、さらに児童名まで確認できるようにしています。特に、全国平均を下回っている問題や、誤答者が多い問題については、「その問題ができなかった」で終わらせず、なぜできなかったのかを考えることが大切です。

また、今回は4月に実施した調査ですので、出題内容には前年度までの既習事項が多く含まれています。したがって、結果から見えてきた課題については、必要に応じて授業の中で再度取り上げ、「分からないまま次へ進ませない」「すべての児童が理解できるところまで戻る」という視点を大切にしたいと思います。

もう一つ、問題そのものにも注目してほしいと思います。全国学力調査の問題は、単純に計算したり、漢字を書いたりするだけではなく、児童の生活に身近な場面を設定し、資料を読み取り、考え、判断して答える問題が多くあります。また、一つの大問の中で問題が連続しているため、最初の小問でつまずくと、その後の問題にも影響する場合があります。

さらに、40分という限られた時間の中で、多くの問題に取り組む必要があります。今回も、最後まで問題に到達できなかった児童がいました。これは単なる「学力」の問題として捉えるのではなく、問題文を読む力、必要な情報を取り出す力、見通しをもって取り組む力、時間を配分する力など、日頃の授業とつながる課題として考える必要があります。

選択問題についても、「正解を当てる」のではなく、「なぜこの答えなのか」「他の選択肢はなぜ違うのか」まで考えさせる授業が重要です。誤答の選択肢にも、児童が陥りやすい思考や勘違いが反映されています。そこから児童のつまずきを読み取ることができます。

そこで、今後は結果を次の三つの視点で活用したいと思います。

① **「何ができていないか」を把握する。**

正答率だけでなく、誤答した児童の人数や割合、児童一人一人の状況を確認する。

② **「なぜできなかったか」を考える。**

知識・技能の不足なのか、問題文の読み取りなのか、判断や表現の難しさなのか、時間配分の問題なのかを考える。

③ **「授業でどう改善するか」を決める。**

必要な内容は再学習するとともに、日頃の授業の中に「読む・考える・比べる・説明する・選ぶ」といった活動を意図的に取り入れていく。

そして、今回の結果を一度見て終わりにするのではなく、「授業→評価→分析→改善→再評価」というサイクルにつなげていきたいと思います。

学力調査の結果は、学校への「通知表」ではなく、私たちの授業を見直すための鏡だと思います。数字の高い・低いだけを見るのではなく、その数字の後ろにいる児童の姿を想像し、「この子に必要なのか」「明日からの授業をどう変えるのか」まで考えることが、今回の調査結果を活用する一番大切なことです。

結果を「反省」で終わらせず、「授業改善」という行動につなげる。

全職員でこの視点を共有し、一人一人の児童の「分かった」「できた」を増やしていきたいと思います。